

今日のみ言葉 278 「神の生きた言葉によって」

2018.4.10

今あなた方は、神の変ることのない、生きた言葉によって新たに生まれた。
(ペテロ1の33)

You have seen new, through the living and abiding word.

一般的には、この世に生まれたことを誕生日として祝う。しかし、単に生まれただけで、もしその生涯が他者に悪をなして、たいへんな痛みや悲しみを与えるもので終わったなら、生まれたいほうがよかった—と思われるであろう。

自らの命を断とうとするほどに、痛みや嘆きで追い詰められることも数多くある。毎年2万数千人が命を自ら断つほどの痛みや悲しみに追い詰められている。不審死や自殺未遂の人も含めるなら、この数よりはるかに多くなると言われている。そこまでいかずとも、何のために生きているのか、生きる目的や意義がわからないで魂の暗夜にて生涯を終えていく場合も数多くあるであろう。死んだら無になるのなら、生きていても無に向っているのだから、空しい—と感じる人も多い。

このようなことからわかるが、この世に生まれたというだけでは、魂の闇は晴れない。それを本当に晴らしてもらうためには、私たちは再び生まれることが不可欠なのである。

それは、何によってであろうか。それが、ここで言われている神の言葉によってである。

私自身も、新約聖書の中の短い神の言葉によって、まったくそれまで知らなかった世界を知らされた。闇がこの世を包んでいる。しかしそのただ中に、永遠の光があることを知らされ、新たに生まれた—ということを実感を与えられた。

神の言葉—それは、今も生きて働いておられる神が直接に私たちに静かな細い声で語りかける言葉であるとともに、それを明確に聞き取った人が書き取った啓示として私たちには聖書が与えられている。聖書は神の言葉の集大成ともいべきものである。

さらにその神の言葉によって新たに生まれた人の言動によっても、私たちは新たに生まれることへと導かれることもある。

神の言葉は、私たちの想像をはるかに超えた力をもっている。聖書の2千頁にわたる膨大な内容の最初に記されているように、神の言葉こそは、宇宙万物を創造するという力を持っている。

そのような力によって私たちは新たに創り変えられるのである。しかもそのためには、ただ幼な子のような心もて、神を仰ぐ、キリストを仰ぐだけでよいというのが、聖書に記されている喜ばしい知らせ—福音である。



徳島県南部の高知県境に近いところでの、家庭での聖書集會に出向いた帰り、山道にて、ジロボウエンゴサクに出会ったのです。（ジロボウとは、スミレのことをタロボウと言っていたことに対する名前、エンゴサク（延胡索）とは、この花の仲間の中国名からきているとのことです。）

渓谷のせせらぎの音が響くところ、山の斜面のあちこちにこの花が美しいすがたを見せてくれていました。

徳島県は人口も74万人ほどと少なく、山地が大部分ですが、そうした山野を歩いてもこの花はどこにでもあるわけではなく、なかなか出会うことは少ないものです。

湿気の多い谷筋、あるいは半日陰の道端などで時折見かけます。

その筒状の花は、青紫の花びらと白い筒状の部分からなっていて、そのやさしい美しさに立ち止まって見入ってしまうものです。

神は、ツバキのような厚い葉と花びらをもった花を創造し、また1ミリにも満たないような小さな花もあり、チューリップのような小さな子供から老人までだれにでも知られ、親しまれる有名な花もあり、そしてこのような、静かな山間の谷間にひっそりと咲く可憐なものもあり、その多種多様さが心に残ります。

それぞれの花が、独自の個性を持ちつつ、神の無限の創造の力、その美、繊細さ、また清らかさ等々を表して私たちに語りかけています。（写真・文ともT.YOSHIMURA）